

(報告書)

## インドネシア・西スマトラにおける換金作物ガンビールの生産と流通に関する

### 人類学的研究

助成研究者 西川 慧 (東北大学大学院・文化人類学)

#### 1. 研究目的

本研究の目的は 2 つある。第一に、インドネシア西スマトラ州における換金作物ガンビール (*uncaria gambir*) の生産開始によって、調査村落の経済・社会関係がどのように再編されつつあるのか明らかにすることである。第二に、調査村落における生産活動を、インドをはじめとする世界経済の流れのなかに位置づけることで、ガンビールの生産と流通がいかなる政治経済的条件のもとで生起してきたのか明らかにすることである。

ガンビールとは、高さがおよそ 1m50cm ほどの、アカネ科カギカズラ属の植物である。その葉からとれるタンニンが染料に使われたり、日本では阿仙薬と呼ばれ、正露丸の原料にも使われている。西スマトラ州では、オランダによる植民地支配以前からガンビールが生産されている。生産されたガンビールは、中国へ輸出されて嗜好品「ビンロウジ」の原料のひとつとして使用されたり、ヨーロッパにおいて皮なめしに使われたり、ジャワ島へ送られろけつ染めの染料として使われていた (Colombijn 1997)。

ただし、本研究が対象としたパシシル・スラタン県のテルック・ダラム村 (仮名) では、ガンビール栽培が開始されたのは 1996 年のことであった。生産されたガンビールの大部分は、インスタント版のビンロウジ「パン・マサラ」 (*pan masala*) の原料とするためにインドへと輸出される。2008 年頃からガンビールの買い取り価格は徐々に上がりはじめ、テルック・ダラム村の生産者たちは多額の現金収入を得ることになった。特に 2016 年には、買い取り価格がさらに高騰し、「ガンビール・ブーム」というべき状況が生まれていた。このガンビール・ブームはなぜ起こったのであろうか。また、ガンビール・ブームによって村の経済関係と社会関係はどのような影響を受けたのだろうか。

先行研究を紐解いてみると、人類学や歴史学は、嗜好品の原料として使われる換金作物の栽培の導入に関して村びとたちの生存を支えるモラル・エコノミーが破壊され、資本主義化していく過程に注目してきたことが分かる (Kohrman and Benson 2011)。例えば、Li (2014) によれば、インドネシアのスラウェシ島の高地では、カカオ栽培の広まりによって未開墾地がつぎつぎに開拓され個人所有化されていった。カカオ栽培には肥料や農薬の散布が必要である。生産者たちはそのための費用を補填するために仲

買人から現金を借り入れており、結果的には支払いに追われて土地を手放す事例が多く、土地資源の集中が起きているという。本研究の対象となるテルック・ダラム村でも、同様の現象が起きていると見ることはできるのだろうか。

## 2. 研究方法

本研究ではインドネシア西スマトラ州パシシル・スラタン県のテルック・ダラム村におけるフィールドワークを行った。まず、これまで収集したデータと聞き取りにもとづいて、ガンビール・ブームに至るまでの村の社会経済史を整理した。続いて、ドローンを用いて調査村落におけるガンビール畑の地図を作製した。特に注目する2つの地区を選定し、当該地区に畑を持つ人びとを対象に、世帯経済状況と土地保有状況を明らかにするための世帯調査を行った。以上のデータを分析することで、ガンビール耕作の開始が村びとたちの生活をどのように変えたのか明らかにした。続いて、都市部に住んでいるインド人のガンビール仲買人、および輸出入に関わるインドネシア政府の役所における資料収集とインタビューを通して、2016年から続くガンビール買い取り価格の高騰の原因を明らかにした。

## 3. 研究成果

ガンビール・ブーム以前のテルック・ダラム村

報告者が調査を行ったテルック・ダラム村は、伝統的に「10の流域」と呼ばれる地域の一部を成している。その名の通り、この地域には10本の河川がスマトラ島の西岸のインド洋へと流れており、上流から下流まで、各河川に沿うかたちで一つずつ「伝統村落」(*nagari*)が形成されている。そのため、村落は、川の源流がある山地から河口付近まで細長いかたちになっている。村落の面積は296.7 km<sup>2</sup>、人口は3万138人となっている(Badan Pusat Statistik Kabupaten Pesisir Selatan 2018)。

その面積と人口規模から分かるように、伝統村落としてのテルック・ダラム村は自然村ではなく、複数の集落の連合体である。自然村はテルック・ダラム川に沿って14つあり、上流と下流では大きく自然環境が異なっている。平野が広がる下流部では水田耕作や、海岸部での漁業が行われてきた。また、下流部には市場があり、村の内外で採れたコメや野菜を販売する商業を営む人も多い。州都パダンと村を結ぶ幹線道路は下流部を通るため、道路や電気といったインフラストラクチャーも整っている。一方の上流部では山がちのため水田は少なく、木材の切り出し、およびコーヒーやシナモンといった換金作物を耕作して現金収入を得ていた。下流部とつながる唯一の道路も十分に舗装されておらず、市場から最上流の自然村まではバイクで2時間ほどかかる。ガンビールを耕作してきたのは、上流部で暮らす人びとである。

現在テルック・ダラム村に居住している人びとの多くは、ミナンカバウ人

(Minangkabau) である。ミナンカバウの人びとは、西スマトラを故地とし、母系の親族体系を支える慣習法とイスラームを両立していることで知られている。村落内の集落は、スク (*suku*) と呼ばれる母系クランごとに形成されている。ミナンカバウでは、クラン外婚制かつ妻方居住制となっており、男性たちは婚姻後には出身集落を出て、自らの妻の母系親族と暮らすことになっている。村落内婚規定はないものの、人びとの多くは村落内の住民のなかから配偶者を探ることが多い。男性たちは、妻とその母系親族に対して経済的義務を負っており、彼の収入はほとんどが妻と子どもたちのために使われる。一方で、男性たちは自らの母系親族たちの監督責任も負っており、親族内で揉め事があれば彼らが解決することになっているために、頻繁に出身集落へ帰るといった光景が見られる。

歴史家の Dobbin (1987: 71-79) の記述にもとづけば、テルック・ダラム村をはじめとする「10 の流域」は、16 世紀頃に中国市場向けの胡椒栽培のために拓かれた地域であった。しかし、オランダが貿易を独占すると、買い取り価格が低下し、胡椒栽培は衰退していった。17 世紀から 18 世紀には、西スマトラ内陸部での織物産業に使うための綿栽培が盛んになった。オランダ植民地政府は依然として胡椒の栽培と生存のためのコメ栽培を奨励したが、綿の買い取り価格が高かったために人びとはこれに従わなかったという。生存のために必要なコメは周辺地域から現金で購入していた。19 世紀には綿に代えてコーヒー栽培が盛んになったことが分かっているが (大木 1984)、詳しい状況は分からない。だが、少なくともテルック・ダラム村の周辺では、植民地化以前から換金作物が栽培されており、貨幣経済が浸透していたことが分かるだろう。

一方で、年配の人びとの話を聞くと、以上の歴史とは正反対の語りが収集できた。すなわち、インドネシア独立後から 1970 年代頃まで現金収入はほとんどなかったという。人びとは水田耕作によって得られたコメと、その周囲の畑で採れた唐辛子、サツマイモ、トウモロコシ、ナスなどを食べていた。特に上流に住んでいる人びとは、現在の主なたんぱく源である海水魚を 15 日に 1 度くらいしか食べることができず、川で淡水魚やエビを捕まえて副食にしていたという。服も木の繊維を加工して作っていた。現金は子どもの学費のため、および石鹼などの生活必需品を購入するためにだけ使われており、ほとんど必要なかった。数少ない現金収入源は、村落の共有地から木材を切り出し、売却することであったという。

植民地支配下での換金作物の栽培と、インドネシア独立後の生存経済というギャップは、テルック・ダラム村が経験した数々の戦争による混乱に由来すると考えられる。1920 年代には世界恐慌の影響で換金作物の値段が急落し、人びとは水田耕作に勤しむようになった。その後の日本軍による占領に続いて、インドネシア独立戦争 (1945 年-1949 年) が起こった。テルック・ダラム村もその戦場となり、多くの家屋が焼かれたという。

さらに1958年には中央政府による共産党寄りの政策に不満を抱いたイスラーム勢力を中心として、西スマトラ州の人びとはインドネシア共和国からの分離と「インドネシア共和国革命政府」(Pemerintahan Revolusioner Republik Indonesia)の樹立を宣言した。中央政府はこれを認めず、西スマトラ州を舞台として中央政府軍と革命政府軍による内戦が起こった。テルック・ダラム村でも戦闘が行われ、革命政府軍のゲリラ兵たちが村の丘陵地に陣を張ったという。平地には中央政府軍の詰め所が置かれ、革命政府軍とのあいだで激しい戦闘が起こった。このような政治的混乱のなかで経済活動が停滞し、人びとは生存経済を中心とする生業へと切り替えていったのだと考えられる。このような混乱は、スハルト政権が誕生する1965年まで続く。

スハルト政権は、インドネシア版「緑の革命」と呼ばれる「ビマス計画」を全国で開始した。食料自給率を上げるためにコメの増産計画を打ち出し、二期作の可能な高収量品種「ビマス」を農民たちへ配布し、それに必要な農薬と化学肥料を購入するために村の協同組合を通して信用貸付を行うようになったのである(セロスマルジャン・ブリージュール2000)。

1974年、テルック・ダラム村でも協同組合が発足した。しかし、コメの増産はあまり成功しなかったようである。原因は、水利設備の不足にあった。テルック・ダラム村の水田は、そのほとんどが湧き水と川からの水に頼った簡素なものであった。高収量品種の栽培のためには従来品種よりも大量の水を必要とするために、十分な成果を出すことができなかつたのである。共同組合は、その発足当初から返済が滞り、1985年に閉鎖された。またこの時期には、インドネシア全体でコメの自給率が100パーセントを達成したことを受けてコメの買い取り値段は急落し、人びとはどんどん稲作から離れていった。それまで主たる現金収入源であった木材の切り出しも、集落周辺の木材はすべて切り倒してしまったために、継続が困難になっていった。このように1980年代から1990年代にかけて、テルック・ダラム村では現金収入を得る手段がどんどん少なくなつていったのである。その結果、テルック・ダラム村は「開発が遅れた地域」(Daerah Tertinggal)としてカテゴライズされるまで経済開発が遅れることとなる。

このような経済的困難を乗り越えるため、人びとは、現金収入を求めて出稼ぎに向かうようになった。なかでも多かったのは、マレーシアへの不法入国による出稼ぎである。当時、クアラルンプールの対岸に当たるスマトラ島東海岸の都市には、出稼ぎ者のためのブローカーがいたという。彼らに現金を渡して専用の密航船でマレーシアに到着すると、そこには中国人のブローカーが多数おり、建築現場や工場での仕事を斡旋した。しかし、1990年代後半にはマレーシア政府による取り締まりが厳しくなつたこと、およびベトナムやパキスタンから安価な労働力がマレーシアに流入したことから、出稼ぎは難しくなつてしまった。そこで帰村した人びとは、少しでも現金収入を得ようとガンビールを耕作し始めたのである。

村のなかでガンビール耕作が始められたのは 1996 年のことであった。テルック・ダラム村から車で 2 時間ほど離れた村では植民地化以前からガンビールが耕作されていた。テルック・ダラム村の男性の一人は、その苗木を持ち帰った。当初の買い取り価格は低く、ほとんどの村びとはガンビール耕作に興味を示さなかったという。しかし、ガンビールの買い取り価格は 1990 年代後半から高騰した。特に近年の値段の上がり方は劇的であり、2015 年には 1kg のガンビールが Rp. 23,833 で売却されていたものが、2017 年には Rp. 62,917 で取引されるようになった。

#### 畑の開拓とガンビール耕作の特徴

村におけるガンビール・ブームに関して考察するまえに、ガンビールがどのようにして生産されるのか確認し、それ以前の生業体系と比較することで、ガンビール耕作が人びとの経済・社会関係にいかなる影響を与えたのか考察したい。ガンビール畑は、主に丘陵地に作られる。ガンビールは直射日光の指す環境を好むためである。現在、テルック・ダラム村の住居は川沿い近くの平地に位置しているため、住民たちは月曜日に畑のある丘陵地へ出かけ、ガンビール加工場を兼ねた小屋 (*pondok*) で寝泊まりしながら働く。住民たちが加工されたガンビールを持って集落に降りてくるのは、土曜日である。ガンビールを仲買人に売却して得た現金は、日曜日に開かれる市場で食料品や日用品を購入するために使われる。



写真 1：ガンビールの若木  
(出典：報告者撮影)



写真 2：ガンビール加工場を兼ねた小屋  
(出典：報告者撮影)

ガンビールの収穫は 2~4 人で行われる。作業は、ガンビールの葉をハサミで切って小屋まで運ぶ「収穫係」(*tukang gampo*) と小屋でガンビールを煮て抽出する「抽出係」(*tukang tungku*) のふたつの役割に分かれている。前者の作業は数名、後者は一人で行われる。収穫係は、切り取った葉を麻袋に入れて小屋まで運び、籠 (*kapok*) に入れる。

一つの籠に入るガンビールの量は、およそ麻袋ひとつ分である。抽出係は葉の入った籠を釜 (*kwali*) まで運び、水をかけながら約 30 分煮込む。煮込んだガンビールの葉は、籠から外したあと、プレス器にかけられる。プレス機の下には溝があり、ここにガンビールの汁が流れ出るようになっている。汁を搾り取った後の葉は小屋の近くに生えたガンビールの木の下に地面を覆うように捨てられる。これにはガンビールの木の肥料にするほか、雑草が生えてこないようにする目的がある。

プレス器の溝に溜まった汁は、すぐに抽出係によって船のようなかたちをした容器に移される。しばらくすると水分が飛び、粘土質のガンビールの抽出物が残る。これをさらに麻袋に入れたうえで大きな石を置き、水分を出す。一晩おかれた抽出物は、形成器を使って、半径 1.50cm 高さ 3cm ほどの円柱型に加工する。加工されたガンビールは一日天日干しにされた後、バイクの荷台に乗せて、集落内に住む仲買人のところまで運ばれる。一度収穫したガンビールは、季節に関係なく 3~4 カ月で再び収穫可能となる。そのため、収穫の時期は決まっておらず、畑ごとに収穫の時期はバラバラである。また、十分な広さのガンビール畑を有していれば、葉が伸びて常に収穫することが可能である。3 人で作業する場合、2ha 以上の畑を有していれば、収穫が終わる頃には最初に収穫した部分の葉が伸びている。



写真 3：ガンビールの葉を煮る  
(出典：報告者撮影)



写真 4：プレス機  
(出典：報告者撮影)

仲買人たちは、ガンビールの状態を見て買い取り価格を決定する。買い取り価格が高い「良いガンビール」の条件は 2 つあった。第一の条件は色が白いことである。白いガンビールは、カテキンの量が多く含まれているとされているからだ。第二の条件は水分の含有量が少ないことである。先述したように、ガンビールは葉からとれた汁を乾燥させたものだ。しかし、仲買人のもとへ運ばれてきたときには、まだ水分を含んで

いることがほとんどである。そのため、生産者が手にする報酬は、売却した総額から水分量を差し引いた額となる。例えば水分を20%含む100kgのガンビールを売却すると、仲買人の買い取り価格が1kg=Rp. 15,000の場合、実際に値段がつくのは $100\text{kg} - 20\% = 80\text{kg}$ であり、生産者が手にするのは $80\text{kg} \times \text{Rp.}15,000 = \text{Rp.} 1,200,000$ となる。水分量は、仲買人がガンビールの状態を目視で確認して決定される。



写真5：ガンビールの抽出物を天日干しする

(出典：報告者撮影)



写真6：乾燥させたガンビールの抽出物

(出典：報告者撮影)

生産者がガンビールを仲買人のもとへ運ぶときにバイクタクシー (*ojek*) を利用している場合は、生産者の受け取る金額はさらに小さくなる。ガンビール畑は丘陵地につくられるために、畑から集落までは傾斜のきつい坂道を通らなければならない。この坂道は舗装されておらず、大量のガンビールをバイクで運ぶ際には転倒の危険が伴う。それゆえ、バイクの運転に自信がないものは、ガンビール専用のバイクタクシーを利用するのだ。バイクタクシーは、特定の仲買人と契約している場合もあれば、完全に独立していることもある。仲買人と契約している場合、生産者が仲買人にガンビールを売却したい旨を伝えると、仲買人が手の空いているバイクタクシーに声をかけ、畑まで取りに行かせる。バイクタクシーの運転手は、運送距離と量にかかわらず、ガンビールの売却価格の10パーセントを生産者から受け取る。先ほど挙げた例を用いれば、バイクタクシーの運転手の取り分はRp. 120,000である。生産者は、残りのRp. 1,080,000を受け取る。

仲買人は、買い取ったガンビールを自らの敷地でさらに2~3日乾燥させたあと、保有する軽トラックで州都パダンに住むインド人商人のもとへ運ぶ。ガンビールを再び乾燥させるのは、一度に運ぶガンビールの量を増やし、より多くの利益を得るためである。また、インド人商人も仲買人に対して、できるだけ乾燥したガンビールを運ぶように要求する。インド人商人は、船でガンビールを首都ジャカルタまで運び、そこからシンガポールを経由してチェンナイやムンバイといったインドの港まで輸出するのである。

上述したガンビール耕作は、それ以前の生業体系と比較してどのような特徴があるのだろうか。ガンビール耕作が始まる以前のテルック・ダラム村では、自家消費用の稲作が中心であった。二期作が始まる 1970 年代以前、在来種のコメの場合、耕作開始から収穫可能になるまで 8 カ月かかったという。水田は母系氏族単位で区画がある程度決まっているため、親族内での共同作業として耕作を行っていたようである。田に水を張る時期を合わせ、一日ごとに各世帯の保有する区画に稲を植え、収穫も共同作業で行っていた。また、水田近くに建てられた小屋で順番に監視をしなければ鳥やイノシシに荒らされてしまうため、これも順番に行っていたという。現金収入は、稲作の合間に木材の切り出しなどの仕事を行うことで賄っていた。

テルック・ダラム村では、基本的に一年中いつでも稲作を行うことができる。季節による気候の変動も少なく、稲作用の水は山からの湧き水や川の水を利用しているからだ。それゆえ、稲作はイスラーム暦にもとづいて行っていた。断食月の 1 カ月前には収穫を終わらせ、断食月明けの大祭 (*idul fitri*) のあとに、収穫したコメを使って結婚式などの人生儀礼にコメを使ったのだという。断食明けの大祭には出稼ぎに出ている人びとも帰ってくるため、人生儀礼には多くの来客があり、出費も多い。収穫時期を断食月に合わせることで、この出費に合わせていたのである。また断食月前に収穫を終わらせることで断食中や大祭の際に労働をする必要がないというメリットがあった。

ビマス計画が始まり二期作が普及したあとは、最短で 4 カ月で収穫が可能になった。断食月前に収穫を行ったあとすぐに田植えを始め、イスラームにおけるもう一つの祭事である犠牲祭前に再び収穫をし、断食明けの大祭に間に合わなかった人生儀礼を行うというサイクルが確立した。村落内で水が豊富な地域に田をもつ人びとは、二期作の恩恵を受けて大量のコメを生産できるようになり、それを売却することで現金収入を得た。一方で、二期作を行うほど水が豊富ではない地域では、依然として一年に一度だけコメを収穫していたようである。このように、ガンビール耕作以前は母系親族内での共同労働による水田耕作が中心であった。耕作サイクルはイスラーム暦に沿っており、共同で作業したほうが効率も良かったからであろう。

稲作と比べた際、ガンビール耕作の一番の特徴は 4 カ月のあいだ常に多くの労働力が必要な点、および耕作地が各家庭から遠くに位置している点である。稲作では田植えのあとは肥料撒きや草取りが必要であるが、毎日朝から晩まで働くことはなく、自宅から日帰りでの作業が可能である。一方でガンビールは収穫のあいだは 2 人～5 人で朝から晩まで働かなければならない。それゆえ、ガンビール耕作が広まったあとは、多くの人びとが畑へ出ていくようになった。一方で水田耕作は十分な現金収入をもたらさないために顧みられなくなり、ガンビール耕作が行われない日曜日などに行われるようになっていった。水田での共同作業も難しくなり、田植えや収穫などは日雇いで賃金労働者を雇って行われるようになっていった。また、人びとが畑で寝泊まりを

するようになったので、夜に水田の周りで監視をする人もいなくなり、イノシシなどによる農作物への被害が大きくなった。結果として、ガンビール耕作を行うようになった上流部ではコメの生産量が少なくなり、現金で必要な分を購入するようになった。それによってますます現金が必要になり、人びとはガンビール耕作により力を入れるようになっていった。

ガンビール耕作の導入によって、生業と人生儀礼のサイクルも分離していった。ガンビールの場合、稲作のように時期を合わせて収穫を行うということはない。それゆえ、断食月に収穫時期を合わせることはできなくなった。すなわち、時期を問わずに経済活動を行うようになったのである。また水田耕作のようにコメを得られるわけではないため、人生儀礼も現金を使って来客用の食事を準備しなければいけなくなった。

このように、ガンビール耕作の開始は生存のための稲作の周縁化をもたらし、貨幣経済への依存を高める結果となった。母系親族間での水田における共同作業も成立しにくくなっている。しかし、これは必ずしも母系親族内の紐帯が弱くなったことを意味しているわけではない。後に見るように、ガンビール畑の開拓は親族関係を中心に始められたし、ガンビールの生産者と仲買人は母系親族関係にあることが多かった。すなわち、ガンビール耕作は、既存の社会関係を再構成しながら行われていると考えられるのである。この点をさらに深めていくために、次に世帯調査の結果から、ガンビール・ブームと開拓の関連について見ていこう。

## ガンビール・ブーム

報告者が行った世帯調査では、背景の異なる 2 つの対象地区を選択した後、ドローンを使って地図を作成し、その地区にガンビール畑を持つ人を対象に行った。対象としたのは、A 地区と B 地区である。A 地区は住民たちが普段生活している集落からバイクで 20 分ほど、B 地区は A 地区を通り過ぎてから 40 分ほどの場所に位置している。A 地区には、1960 年代まで集落があり、かつてそこに暮らしていた住民と親族たちが畑を利用していた。一方、B 地区はそれまで開拓されたことがなかった処女地であり、多様な出自の人びとがガンビール耕作を行っている。

### A 地区

この地区には、1960 年代まで十数世帯が暮らす集落があった。集落には、シクンバン (*sikumbang*) 氏族とカンパイ (*kampai*) 氏族という 2 つの母系氏族が暮らしていた。しかし、西スマトラ州で発生した内戦の際、反政府軍のゲリラが A 地域に立てこもったため、住民たちは集落を放棄して他の集落へと合流した。内戦後、住民たちは A 地域から木材を切り出して販売する仕事を始めた。その後、1970 年代からは A 地区の傾斜が激しい土地でコーヒー、シナモン、ゴムを栽培するようになった。ガンビールは、

2008年頃から、これらの換金作物に代えて植えられるようになった。

A地域にガンビール畑を所有しているのは、かつてここに暮らしていた2つの母系氏族の成員たち、および女性成員の夫たちであった。調査の結果、A地区にガンビール畑を有しているのは18人（シクンバン氏族14人、カンパイ氏族4人）、ガンビール畑の総面積は24.25haであった。平均すると、1人当たり1.35haである。この地域で最も広い畑は2.50ha、最も狭い畑は0.25haであった。最も狭い畑を持つ人物は、親族のなかでも若い世代に当たる。その隣には両親の畑があるため、将来的により広い土地を相続する可能性がある。

## B地区

この地区は、かつて森林に覆われていた村落共有地であった。ここに畑を所有する人びとは、1985年頃に村落から許可を得て土地を開拓した。当初、彼らはコーヒーを植えていたが、後にガンビールへと植え替えが行われた。新たな開拓地であるためか、土地の所有者が特定の母系氏族に集中していない点がA地区との違いである。開拓を主導したのはA地区のカンパイ氏族出身のイサップ氏（仮名）であった。彼は、自らの母系親族、妻の母系親族とその夫たちを誘って開拓を始めた。さらに、イサップ氏と知り合いであった別の集落出身者も開拓に参加した。また、イサップ氏と同時期に開拓を行っていたグループがおり、イサップ氏は彼らと協力して畑までの道を共同作業で舗装しながら開拓を行ってきた。

調査の結果、B地区にガンビール畑を有しているのは42人、ガンビール畑の総面積は79.50haであった。平均すると、1人当たり1.89haである。A地区に比べて規模の大きな畑が多い。この地域で最も広い畑は6ha、最も狭い畑は0.70haであった。最も広い畑を所有するのは、ガンビールの仲買人も務める男性であった。

テルック・ダラム村におけるガンビール耕作は、4つの時期に分けて考えることができる。すなわち、ガンビールの耕作が一部の人びとによって始められた「黎明期」（1996年-2008年）、値段が高騰した「第一次ガンビール・ブーム」（2008年-2012年）、買い取り価格が伸び悩んだ「低迷期」（2012年-2015年）、再び値段が高騰した「第二次ガンビール・ブーム」（2015年-2018年）である（表1参照）。ただし、本助成を受けて行った調査（2018年8月）の際に村を訪ねると、ガンビールの買い取り価格はすでに1kgあたりRp. 17,000まで低下しており、低迷期と同程度であることが分かった。

表 1：ガンビール買い取り価格の推移（出典：インドネシア統計局ペシシル・スラタン県支部（Badan Pusat Statistik Pesisir Selatan 1994-2018）をもとに報告者作成）

	西暦	1kgのガンビールの値段 (Rp.)	1kgのガンビールの値段 (USD)
黎明期	1996年	4,742	2.02
	1997年	6,900	2.49
	2000年	7,733	0.94
第一次 ガンビール・ブーム	2008年	26,417	2.74
	2010年	38,083	4.18
	2012年	17,958	1.92
低迷期	2013年	17,917	1.72
	2014年	23,333	1.95
	2015年	23,833	1.79
第二次 ガンビール・ブーム	2016年	47,083	3.53
	2017年	62,917	4.66

では、ガンビールの買い取り価格の推移と開拓はどれほど関係しているのだろうか。以下、地域別に見ていこう（図 2 参照）。A 地区の場合、18 人の畑所有者のうち、ガンビール耕作以前から開拓を行っていた人物は 12 人いる。前述したように、彼らはコーヒーやシナモンを栽培していた。それらを切り倒しガンビール耕作へと切り替えるのは、およそ 2004 年頃の黎明期から第一次ガンビール・ブームが始まる 2010 年頃であった。ちょうどその頃、はじめからガンビール畑をつくるために開拓を行った人びとが 5 人いる。これらの人びとは 1980 年代に開拓を行った人びとの下の世代に当たり、両親や兄弟がガンビールを植え始めるのに合わせて畑を作り始めた。例えば 2007 年に開拓を行った人物は、それまで木材の切り出しをして生計を立てていたが、販売可能な木が減ってきたためにガンビール耕作を始めたと語る。一方で、低迷期に開拓を行ったのは、1 人だけであった。すなわち A 地区では、1980 年代に開拓した土地において黎明期にガンビール栽培を始めたこと、それに合わせて土地を持っていなかった人びともガンビール栽培に乗り出したことが分かる。

開拓時期と土地の広さについては、若干の相関関係がある。1960 年代に開拓を行った 5 人のうち、4 人は平均の 1.35ha 以上の土地を持っている。1.35ha 以上の土地を持つ人物 9 人のうち、6 人がガンビール耕作以前に開拓を行っていた。しかし、2004 年に開拓を行った人物は 2ha の土地を保有しているし、2007 年に開拓を行った人物は地区で最も広い 2.50ha の畑を保有している。つまり、早くから開拓を行った人びとは広い土地を手に入れる傾向があるが、あとから参入した人びとでも広い土地を手に入れ

ることは不可能ではなかったことが分かる。

一方の B 地区はどうだろうか（図 3 参照）。開拓の数を見れば、低迷期に当たる 2012 年に開拓した人物が多い。買い取り価格が下がっても、テルック・ダラム村ではほかに十分な現金収入源がないため、ガンビール耕作は依然として魅力的であったのだろう。二番目に多いのは、1985 年に開拓した人びとである。彼らは値段が上がり始めた 2008 年頃にガンビールへと植え替えている。そして、2012 年以降も少数ではあるが開拓が継続的に行われている。また興味深いことに第二次ガンビール・ブームの際に開拓を行った人数は、わずかに 4 人であった。

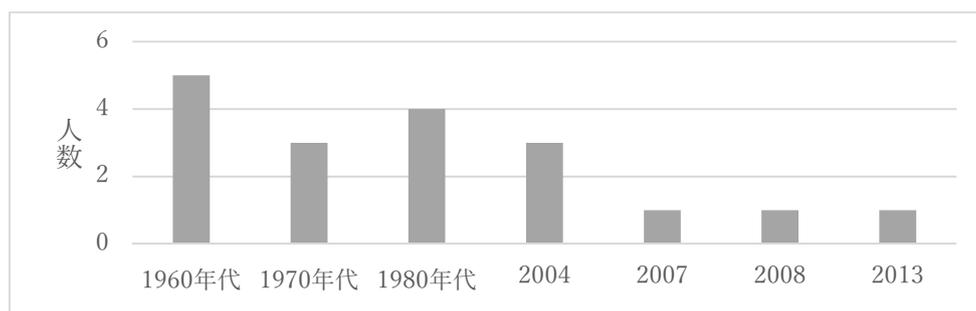


図 1：A 地区における土地の開拓時期（出典：調査データをもとに報告者作成）

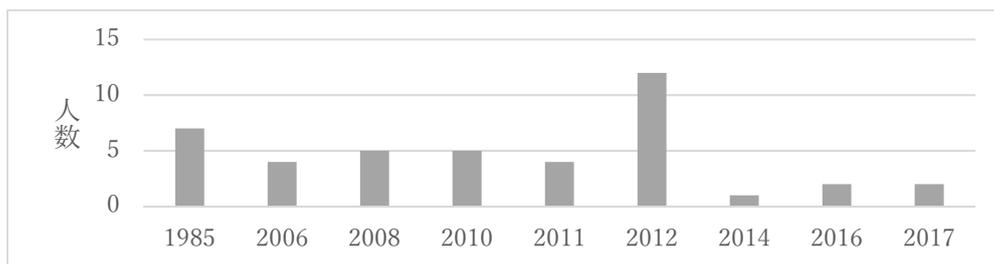


図 2：B 地区における土地の開拓時期（出典：調査データをもとに報告者作成）

では、B 地区において新たに参入することができた人物とはどのような人びとなのだろうか。まず目立つのは、最初に開拓を始めたイサップ氏の母系親族である。B 地区に畑を持つ 42 人のうち、6 人がイサップ氏の母系親族であった。彼と同世代の母系親族は 1985 年に、その下の世代は 2006 年頃から開拓を行っている。また、イサップ氏の妻はチャニアゴ氏族の女性であり、彼と同じくチャニアゴ氏族の女性を妻にしている男性たち 3 人も同時期に開拓を行っている。先述したようにミナンカバウでは妻方居住が一般的であり、チャニアゴ氏族と婚姻関係にある男性たちは近所に住んでいる。イサップ氏は、彼らを誘って開拓を行ったのである。その後、チャニアゴ氏族の若い男性たち 5 人も第一次ガンビール・ブームのときに参入している。同様に、イサップ氏と同時期に開拓を始めた別グループは、親族・姻族 5 人で開拓を行っていた。

一方で、最初の開拓者と親族関係がない、別の集落出身の人びともいる。イサップ氏

との会話のなかでガンビール耕作に興味を持ち、彼にタバコを贈るなどして関係を築いていったのだという。そして良好な関係を築いたあとに、親族 8 人を誘って開拓を行った。2012 年に開拓をしたのは、このグループであった。イサップ氏と彼らは現在でも良好な関係にあるという。

このように、B 地区における開拓のプロセスでは、最初の開拓者の男性の母系親族から始まり、妻の母系親族たち、そして知人へと開拓の担い手が変わっていった。開拓は、親族を起点として始められ、知人へとネットワーク状に広がっていったのである。A 地区においては、この傾向はより顕著である。かつて集落に住んでいた人の親族たちが開拓を担っていた。ガンビール耕作の開始とともに水田耕作における共同作業が周縁化された一方で、親族ネットワークは開拓を支える原動力へと役割を変えていったのである。

#### 土地資源の集中に関する分析

次に、ガンビール畑を保有する世帯と保有しない世帯を比較することで、ガンビール・ブームに伴って村落内の階層化について分析していきたい。対象としたのは、A 地区のシクンバン氏族の全 12 世帯、およびイサップ氏の妻が所属するチャニアゴ氏族の全 29 世帯である。

シクンバン氏族の場合、A 地区から移住する際に居住地が分散してしまった。なかにはマレーシアや西スマトラ州内の他地域へ移住した人も多い。確認できた範囲では、村のなかに住んでいる成員は 12 世帯であった。そのうちガンビール畑を所有していたのは 7 世帯である。ただし、そのうち一世帯は高齢のために耕作していない。ガンビール畑を保有していない 5 世帯のうち、2 世帯は丘陵地から遠い市場で商業を営んでいるため、ガンビール耕作を必要としていなかった。残りの 3 世帯は、いずれも離婚や死別などの理由により世帯内に男性がおらず、開拓ができないという。

チャニアゴ氏族 29 世帯のうち、ガンビール畑を保有していないのは 5 世帯であった。そのうち 2 世帯は、魚の行商や製氷所での賃金労働など、夫が他の職業についていた。また 1 世帯は結婚したばかりであり、賃金労働で現金を貯めてガンビール畑を開拓するつもりだという。夫がいない世帯では、開拓ができず、高齢の女性一人が他人のガンビール畑で賃金労働していた。このように、ガンビール畑を保有していない世帯には男性がいないか、他の職業についている傾向が見られた。

次に各世帯の収入について考えるため、特徴の異なる 5 つの世帯を対象に見ていく（表 2 参照）。なお、本稿における世帯とは家計をひとつにする集まりを指す。また、一ヶ月の平均収入は、調査時のガンビール買い取り価格  $1\text{kg} = \text{Rp. } 17,000$  で算出した。

①の世帯はイサップ氏の娘の世帯である。比較的広いガンビール畑を持ち、両親に手伝ってもらいながらガンビール耕作を営む。②は、イサップ氏の妻の妹の世帯であ

る。夫はイサップ氏と共に開拓を行っており、広い畑を妻と二人で営む。忙しい時にしか賃金労働者を雇わないため、ガンビール畑からの収益の大部分を収入として得ている。

表 2：5 つの世帯のプロフィール（出典：調査データをもとに報告者作成）

		①	②	③	④	⑤
世帯の人数	総人数	3	5	4	2	6
	男性	1	1	2	0	2
	女性	1	2	1	1	2
	就学児童	1	2	1	1	2
水田	広さ	0.25ha	0.25ha	0.25ha	0	0.75ha
	平均収穫量	100	175	300		375
	コメ購入	無	無	無		無
ガンビール	広さ	2ha	2.50ha	0.30ha	0	0.50ha
	平均収穫量	1800kg	2000kg	200kg		350kg
	労働者	両親と夫	夫婦	夫		夫と両親
一ヶ月の平均 収入(Rp.) 1kg = Rp.17,000 <sup>1</sup>	ガンビール	3,230,500	5,506,250	660,250		1,160,625
	賃金労働	0	0	400,000	1,000,000	
	その他					300,000
一ヶ月の平均 支出(Rp.)	生活費	1,400,000	?	800,000	600,000	1,000,000
	学費	0	?	200,000	?	400,000
借金(Rp.)		100,000	20,300,000	750,000	0	?

③の世帯はチャニアゴ氏族のなかでも貧しいとされている。保有しているガンビール畑も 2 週間足らずで収穫し終えてしまうため、それ以外の時期は他の人の畑で働くことで収入を得ている。他人の畑で働く場合、畑の所有者が収益の半分を取得し、残りを労働者で分けるという方法を取っていることが多い。畑で働いているあいだの食費とタバコ代は所有者が負担する。それゆえ、③の世帯が得ることができる利益は働く畑によって異なるが、一ヶ月でおおよそ Rp. 400,000 ほどだという。

④の世帯は未亡人と高校生の娘が二人で暮らす世帯である。ガンビール畑は保有しておらず、他の人の畑で働いて収入を得ている。彼女の場合、③の世帯とは異なり、一日 Rp. 50,000 で雇われて仕事をする。また都市部の大学に通う大学生の息子がいるが、

<sup>1</sup> 調査当時のルピアの為替レートは、Rp. 1= 約 0.0076 円であった。

奨学金を得ているため学費はほとんどかかっていないという。

⑤は、5つのなかで唯一ガンビール以外の収入がある世帯である。彼らはガンビール畑と水田で働くかたわら、畑の周囲にあるピンロウ (*pinang*) を収穫して売却している。しかし収穫量も少ないため、十分な収入にはなっていないという。それに加えて、この世帯ではタバコや菓子類などを売る小売店を経営している。その売り上げに関しては詳しく知ることはできなかったが、少なくとも一ヶ月に Rp. 200,000 以上は得ていると考えられる。ガンビールのみに頼らず、多角的な世帯経営をしていることが⑤の特徴である。

以上の5つの世帯を比べてみると、やはり広いガンビール畑を持っているほど収入が多いことが分かる。例えば①の世帯の一ヶ月の収入は Rp. 3,230,500 であり、この地域の地方公務員の月給に相当する。それよりも広いガンビール畑を保有する②は、村落部での収入としてはかなり大きなものである。すでに買い取り価格が低下したとはいえ、2ha 以上の畑を持っている人びとにとっては、ガンビールは依然として大きな収入源だと言えるだろう。第二次ガンビール・ブームの際は、買い取り価格が3倍以上であったことを考えると、彼らが得た収入はとてつもない額である。

一方で、③のように小さなガンビール畑しか保有していなかったり、④のように畑を保有していない者にとって、現在の買い取り価格では生活で精いっぱいである。③の世帯は水田からより多くのコメを得られるとはいえ、①の世帯と比較すると、現金収入は三分の一である。この点を考慮すれば、ガンビール耕作によって村落内の経済的格差が広がっていると言えるだろう。

ただし、興味深いのは現金収入が多いはずの②の世帯が多額の借金を背負っている点である。①、②、③の世帯はいずれも同じ仲買人にガンビールを売却していた。この仲買人はチャニアゴ氏族の出身であり、彼らの親族に当たる。テルック・ダラム村では、仲買人は生産者に貸付をするにあたって、自らのもとへガンビールを売るように口頭での契約を結ぶことが一般的である。②の世帯は専門学校に通う息子の学費の支払いに加えて、新たに畑を開拓しようとしていた。その費用を仲買人から借りることで補填し、その見返りとしてこの仲買人にガンビールを売っていたのである。

額は小さいながらも、同様の事例は①と③の世帯でも見られた。彼らは新たな土地の開拓というよりも、家族が病気になった際の医療費や、バイクなどの購入のために信用貸付を受けていた。⑤の世帯は別の仲買人にガンビールを売っており、その額は分からなかったが、同様に貸付を受けているようである。この仲買人も、やはり⑤の世帯の親族であった。ガンビール畑を保有している世帯であれば、仲買人たちはできる限り貸付を行う。口頭での契約を通してガンビールを大量に自らのもとへ仕入れることで、取引を通して得ることができる利益が大きくなるからだ。

また、彼らは新たなガンビール畑の開拓を支援することも多い。ガンビール畑の開

拓には多額の資金が必要である。例えばガンビールを加工する小屋を建てるためには Rp. 15,000,000 もの費用が必要となる。十分な貯えがない限り、これだけの出費を一度に出すことができる世帯は少ない。仲買人たちは少額ずつ信用貸付を行いながら生産者が本当に自らのもとへガンビールを売ってくれるのか見極めつつ、生産者を支援するのである。テルック・ダラム村においてガンビール耕作がこれだけの勢いで広まったのも、このような信用貸付システムがあったからであろう。

仲買人からの貸付金に依存していく過程は、Li (2014) が指摘したような、貸付金の返済に追われて生産者たちが土地を売却することで仲買人に土地が集中するという状況を思い起こさせる。しかし、Li の調査地との違いは仲買人たちが強く返済を求めることができないという点にある。仲買人たちは、生産者が他の仲買人のもとへガンビールを売ってしまうのではないかと常におびえている。強く返済を求めることは、生産者との関係が崩れてしまい、他の仲買人のもとへ逃げられてしまうことにつながる。それゆえ、仲買人は返済が滞っても生産者を責めることはなかったのである。仲買人たちは運転資金を自ら準備していたり、他の仲買人から無利子で貸付を受けており、返済に差し迫ることもなかった。むしろ、貸付金を通してガンビールを集める方が効率的であったのだ。

最後に、仲買人と生産者が母系親族関係で結ばれていた点に注目しておきたい。テルック・ダラム村において、母系親族関係は相互に助け合うべきであるとされている。水田耕作が盛んであったころは、共同作業においてその理念が結実していた。ところがガンビール耕作の始まりとともに、信用貸付を行うことでガンビール耕作を奨励するシステムへと変質していった。仲買人たちは、あくまでも信用貸付によって母系親族たちを助けているのだと強調する。ガンビール・ブームを支えていたのは、母系親族関係を通じた貸付システムだったのである。

#### インド人商人に対するインタビュー結果

最後に、ガンビールの買い取り価格がなぜ高騰しているのか明らかにするために行った、インド人商人およびインドネシア商業省へのインタビュー結果を提示しておきたい。報告者がインタビューを行ったのは、西スマトラ州都パダンで輸出業を営む、ゴア出身の 30 代の男性である。パダンにはガンビールを輸出している企業が 5 つあり、いずれもインド出身の人物が経営している。今回インタビューした男性は、2010 年にシンガポールの投資家の援助を受けて起業した。現在は 3 人のインド人と 37 人のインドネシア人の従業員を雇用している。

このインド人商人によれば、インドに輸出されたガンビールはほとんど「パン・マサラ」に使われる。パン・マサラは乾燥させたビンロウの実と数種類のスパイスを混ぜたもので、嗜好品としてインドをはじめとする南アジアで使用されている。そのサンプル

ルとして、インドにおいて最もポピュラーな Rajnigandha 社のパン・マサラを見せてくれた（以下の写真参照）。パン・マサラはインド国内で生産され、ネパールやパキスタンといった南アジアの国々へ輸出される。パン・マサラには、ビンロウ、カテチュ（*catechu*）、ライム、カルダモンが使われている。この内、ガンビールはカテチュを精製するために使われるという。

続いてガンビール買い取り価格の急激な高騰について尋ねると、男性は少し曇った表情で「ガンビールの値段はインドルピーとインドネシアルピアの為替レートが変動した結果だ」と吐き捨てるように語った。さらに、「ガンビールはインドなどの南アジアの国でしか必要とされていない。他の国は必要としていないんだ。南アジアでガンビールの需要が高まれば値段は上がる。それだけだ」と述べた。確かに、インドとインドネシアの為替レートは、2016年の1月から2017年の3月までルピア安が進んでおり、ガンビールの値段が高騰した時期と重なっている。しかし、ガンビールの値段が低迷していた2012年から2015年にかけて、対ルピーのルピアの値段は2016年よりもずっと安く、必ずしも為替レートがガンビール買い取り価格の高騰した決定的要因と言うことはできないだろう。



写真7：インド人商人が見せてくれたものと同じ種類のパン・マサラ（出典：報告者撮影）

文献調査の結果、パン・マサラにガンビールが多く使用されるようになったのは、2002年頃のものであることが分かった。それまでは、インド国内で生産されている *katha* (*Acacia catechu*) と呼ばれる植物が使われていた。2001年にインド国内で出版された学術論文（Sani and Sharma 2001）において、*katha* の栽培に伴ってインド国内の森林が減少しているため、それに代えてインドネシアのガンビールを輸入することが提案されている。その論文の中では、ガンビールが *katha* に比べて体への害も少ないことが強調されている。インドネシア貿易省の役人も、インドが大量にガンビールを輸入するようになったのは2003年頃だと述べていた。このことから、少なくとも2010年までのガンビールの値段の上昇は、パン・マサラの原料が *katha* からガンビールへと移行したために引き起こされたのだと予想できる。

#### 4. 考察

これまでの議論をまとめよう。社会経済史を振り返ると、インドネシア独立前後から1970年代までのテルック・ダラム村では相次ぐ紛争の戦地となったために、それまでの換金作物耕作を営むことができなくなり、生存経済へと傾いていったことが明らかになった。1970年代からは現金収入の必要性が高まり、人びとは木材の切り出しやマレーシアへの出稼ぎを行うようになったが、それも売買の対象となる樹木の枯渇や移民規制政策のために難しくなっていく。そこに登場したのがコーヒーやシナモンであり、そしてガンビールであった。村びとたちは多額の現金収入を求めて開拓を行ったというよりも、生活に必要な現金を求めて森林を開拓していった。

ガンビール耕作の開始は、生存のための水田稲作の周縁化をもたらし、貨幣経済への依存を高めた。その結果、水田で行われていた母系親族での共同作業も衰退していった。また、かつての生業活動は人生儀礼のサイクルと結びついてきたが、常に多くの労働力が必要なガンビール耕作の導入により、人生儀礼のサイクルから分離していった。

ただし、これは必ずしも母系親族関係の重要性が低下したことを意味しない。ガンビール畑の開拓は母系親族関係を起点として行われていた。特に重要なのは、特定の母系親族の女性と婚姻した男性たちのネットワークである。妻方居住が一般的なミンカバウでは、これらの男性たちが隣同士に暮らしており、妻の母系氏族への経済的貢献を求められているからであろう。また上では触れなかったが、開拓の担い手は男性であるべきだとする村落内のジェンダー規範も関係しているだろう。なかでも最初の開拓者と近い人びとは広い土地を手にするようになった。そして、彼らこそがガンビール・ブームで多額の利益を得た人びとである。一方で、畑を持たない人たちとの経済格差は大きくなっていった。

世帯調査の結果を注視すると、生産者たちの多くが母系親族関係にある仲買人から借金をしていることが明らかになった。その見返りとして、生産者たちはこの仲買人へガンビールを売却する契約を口頭で結ぶ。生産者たちの視点から見ると、ガンビール畑の更なる拡大のために現金が必要なとき、および医療費や学費の支払いなどに困った際に頼ることができる相手として仲買人を見ていた。仲買人たちは、生産者が他の仲買人のもとへ移ってしまうことを恐れており、先行研究で指摘されていたような返済を強く迫ったり土地を接収するような事例は見られなかった。ガンビール耕作の拡大を支えていたのは、このような仲買人と生産者のパトロン＝クライアント関係であった。母系親族関係は、水田での共同作業を担う水平的な関係から、最初の開拓者を中心とした男性たちのネットワークへ、そして仲買人を中心として貸付金によって結びついたパトロン＝クライアント関係へと変質していったのである。

それでは、ガンビール・ブームはどのようにして引き起こされたのだろうか。少なくとも、2010年までの第一次ガンビール・ブームは、それまでインドでパン・マサラのために一般的に使用されていた *katha* からガンビールへと移行したために引き起こされたことが明らかになった。すなわち、*katha* の製造のために引き起こされていたインド国内での森林減少を防ぐために、インドネシアのガンビールを多く使用するようになったのである。しかし、残念ながら2016年以降の第二次ガンビール・ブームが引き起こされたメカニズムに関しては十分に明らかにすることができなかった。この点については、今後の課題としたい。

## 5. 結論

本研究の目的は、インドネシア西スマトラ州の村落社会においてガンビールの生産と流通がいかなる政治経済的条件のもとで生じてきたのか明らかにすること、およびガンビールの生産開始によって、調査村落の経済・社会関係がどのように再編されつつあるのか明らかにすることであった。嗜好品の原料として使われる換金作物の栽培をめぐる先行研究は、耕作開始による村落内のモラル・エコノミーの崩壊と、一部の村びとへの土地資源の集中を指摘してきた。

本研究の舞台となったテルック・ダラム村におけるガンビール・ブームは、少なくとも2010年の段階までは消費国インドにおける森林資源保護のポリティクスによってもたらされたことが明らかになった。また、テルック・ダラム村における経済・社会関係に関しては、ガンビール耕作の開始によって生存経済としての稲作が衰退し、それを支える母系親族関係での共同作業が行われなくなっていった一方で、耕地を開拓するために母系親族関係が動員されていったこと、母系親族内で仲買人と生産者というパトロン＝クライアント関係が構築されていったことが明らかになった。

## 6. 引用文献

Badan Pusat Statistik Kabupaten Pesisir Selatan, *Pesisir Selatan dalam Angka*, Badan Pusat Statistik kabupaten Pesisir Selatan, 1994-2018.

Colombijn, Freek, "The ecological sustainability of frontier societies in eastern Sumatra," in Peter Boomgaard, Freek Colombijn and David Henley (eds.), *Paper landscapes; explorations in the environmental history of Indonesia*, 1997, KITLV Press, pp309-339.

Dobbin, Christine, *Islamic revivalism in a changing peasant economy: central Sumatra 1784-1847*, Curzon Press, 1987.

Kohrman, Matthew and Benson Peter, "Tobacco," *Annual Review of Anthropology*, 2011, vol. 40, pp. 329-344.

Li, Tania Murray *Land's End: Capitalist Relations on an Indigenous Frontier*, Duke University

Press, 2014.

大木昌、『インドネシア社会経済史研究—植民地期ミナンカバウの経済過程と社会変化』、勁草書房、1984。

Sani, P L and Sharma H W, “Uncaria gambier -a New Source of Katha,” *Indian forester*, 2001, 127, pp. 879-882.

セロスマルジャン、ケンノン・ブリージュール、『インドネシア農村社会の変容—スハルト村落開発政策の光と影』、中村光男監訳、明石書店、2000。

## 7. 英文アブストラクト

An Anthropological Study on the Production and Trade of *Gambir* in West Sumatra, Indonesia

Kei NISHIKAWA

(Graduation School of Arts and Letters, Tohoku University)

The purpose of this study was to clarify the mechanism of the “*gambir*-boom,” the progressive increase in price of *gambir* from late 2000’s, and the impact of the starting the production of *gambir* on Socio-economic relationship in the village society in West Sumatra, Indonesia. *Gambir* is cash crop used for *pan masala*, an packaged version of area nut product.

For achieving this purpose, I did fieldwork in a village of West Sumatra on the socio-economic history, household survey and interview with Indian *gambir* trader. My field site is a village of Minangkabau people, well-known with its matrilineal kin group.

As a result, I revealed that Gambir-boom from 2008 to 2010 was caused by the substitution of *gambir* for *katha* to produce *pan masala* in India because the production of *katha* in India was considered as one of the causes of deforestation. Through fieldwork in West Sumatra, I found out that the starting of *gambir* production marginalized the rice cultivation as the subsistence economy and the cooperation among matrilineal kin group. Matrilineal kin’s network, however, was mobilized for opening up forest to cultivate *gambir*. Additionally, the relationship among matrilineal kin was reconstructed as patron-client relationship between the traders and producers of *gambir* supporting the latter in the economic difficulties.